

# 保育者養成の一試案

保育者養成はここ十数年来、養成機関およびその関係者によって繰り返し論じられ、研究、検討されてきた問題である。たとえば、養成機関における教育課程の組織、編成の問題、教授内容の問題、学生指導の問題、運営の問題、実習の問題など、列挙すればいとまがない。

それらの問題の一つをとりあげてみて、一連の相互密接な関連問題が付随してくるもので、本質的には、よりよき保育者の育成に帰結する同質的問題の提起のように思われる。保育科学生の資質向上の問題をとりあげてもわかるように、教員免許状取得および学科修得単位、修学期間の問題をはじめとして、前述の諸分野にわたる問題に拡大する。

私も養成機関に与えられている課題としては、広範囲にわたる保育者の資質が要求されていることと、保育の学科は種々の学

武井幸子



科と直接の関連をもち（一般教育科目、基礎教育科目、専門科目の連携）しかもこれらの要求を二年の短期間に一応解決しなければならぬことであった。

二年間という短い時間的制約の中で、のぞましい保育者となるために、学生に要求される習得、研修すべき学問技術の量は非常な努力と時間を要し、相当の覚悟と心がまえがなくてはならない。これは幼児教育の重要性とあいまって、保育者の高度な資質水準が要求されることはむしろ当然なことといわねばならない。保育科の学生として入学したものは、保育者になるならぬにかかわらず、繁忙きわめる学生生活にも、自らを顧慮させていく意志と体力と、情操豊かな人間性を育成しなくてはならない。

保育者養成機関に課せられた責任は、重かつ大であることは論をまつまでもない。ここに保育者養成にたずさわるものの生きが

いもあるのであって、大局的な問題にとりくみながらも身近に提起するこまかな現実問題にぶつかり、その一つ一つを解決してゆかねばならないのである。

全国的に保育者養成の任にあたる四年制、二年制の大学および各種学校の数とその分布は広範囲におよぶが、各々の学校が当面する実情や問題点にはかなりの格差がある。現に私の経験する実情においても、種々の理由から当然設置されるはずの付属幼稚園の設立がまだ実現に至らない状態である。このことは保育者養成上、教育課程の編成や教授内容、教育実習、学生指導の諸問題に大きな影響を与えている。しかし、与えられた教育環境や条件のよしあしにかかわらず、保育者養成に直接たずさわるものに乗せられた責任の軽減がゆるされるはずはなく、そこに学生指導上の悩みも苦しみもあり、また創意や工夫も生まれてくるものと思ふ。

さて、求められるままに保育者養成のささやかな一試案をここに紹介し、ご批判をおおぐ機会が与えられたことは感謝にたえない。

ここへのべる一例は、保育者養成を目的とする新設短期大学創立当初における学生指導の一試案である。当大学は東京都町田市の人里はなれた山中に、山林山野をきりひらいて建設された小規模な学校である。一日午前三回、午後三回計六回運行するスクー

ルバスが唯一の交通機関である。徒歩では駅から学校まで、一時間ないし一時間以上を要する不便な地理的条件におかれている。

休講あるいは講義と講義の間の空白時間も、市街に出るには十分ではなく、学生は完全に外界から遮断されたかたちとなる。新設大学のため、新入学生にはもちろん上級生はない。高等学校生活から大学生生活への移行に、新しい環境にもなれず多少のとまどいの様子もみられた。

施設、設備（ピアノ、図書館、学生厚生施設）も、世間一般の新設校の例にもれず不備であった。校友関係も密でない状態のもとは、活発な学生生活の諸活動がみられるわけがない。講義においても、各教科から要求される必読の本の山に悲鳴をあげるということもない。高校生活よりやや緩慢になった大学の時間割に、むしろ安易な大学生活に陥るおそれも感じられた。もちろんオリエンテーションの際、講義一週一時間に対し二時間、演習一週二時間に対し一時間の、予習、復習時間を含むことは全学生に説明した。しかし学生はどのようにこの説明を了解し、自発的学習の実をあげているかは私どものうかがい知るところではない。

ただ、保育科学生が資質向上のためなすこと多くして、その限定された時間の短いことを思えば、より積極的な指導の働きかけがここに必要と思えた。何かにつけて不便を感じる地理的条件におかれた学校環境は、他面都心では得がたい新鮮な空気と大自然

に囲まれた利点をもっている。この点を学生指導の上に有効に導入してこそ、与えられた環境を十分に生かし、生活条件の欠陥も満たされてあまりあるものになるのではないかと思った。

大自然に接し、その中での人間教育、情操の陶冶こそ、幼児教育に不可欠な要因であり、最良の教育的環境であるといわねばならない。そこで、学生全員に草花の栽培を経験させることは有効な試みではないかと思ひ、これを「保育総論」の一部の時間および休講、自由時間を使用し、実行に移した。

### 土づくり、花づくり、芝生づくり

大自然に恵まれている環境とはいへ、大学用地一帯の土壌は固い赤色粘土地である。花壇に設定した場所も、前年度庭園造成に芝が移植されたが、大地に根をおろすことができ枯れてしまっていた。このような状態で草花栽培の計画はまず「土」づくりから始めなければならなかった。幸いに近くの山林には腐葉土があり、これを他の肥料と併用することができた。

約六十名という学生数と、女性の労働力と時間を考慮し、前述の芝の枯れていた前庭約三十数坪をその作業用地と設定した。

### 準備 (一)

#### 1. 種子、球根の選択、購入

草花の種子、球根は幼稚園庭にふさわしい種類、色彩、季節を考慮した。

また「おじぎ草」のように科学的現象(反応)を即時に示すものも選択した。

その種類は次のようなものである。

#### ○二年草

朝がお、アスター、葉鶏頭、鶏頭、ひまわり、おしろい花、コスモス、千日紅、サルビア、ルピナス、マリゴールド、おじぎ草

#### ○牧草

芝生づくりはしろうとは困難とされているので、栽培容易な牧草の種子を箱で購入、これを芝の種子の代用とした。

#### ○球根

グラジオラス、カンナ

種子の購入は市販の袋入りのものよりは「はかり売り」のものが安価につく。しかし「はかり売り」はこの種のもの屋にもあるわけではない。私の場合実情を知らなかったこと、地方から赴任してすぐのことで、土地の不案内とでかなりの時間と労力を費した。その結果有名種苗会社か、大きな園芸店、栽培業者にあらかじめ問合せ交渉するのがよいということがわかった。

## 2. 園芸道具の種類と購入

経費の関係上道具の購入は最少限度にとどめ、かなり離れたところにある付属高等学校から借用することにした。

その種類は次のようなものである。

- ・移植ゴテ（柄との継目の丈夫なものを選択する）
- ・シャベル
- ・くわ
- ・レーキ（床ならし用）
- ・じょうろ（穴の細かいものを選択する）

## 3. 肥料の選択と購入

肥料は農業協同組合で購入すると格安である。その種類は次のようなものである。

- ・油粕
  - ・過燐酸石灰
  - ・苦土石灰（酸性の土壌を中和させる）
  - ・腐葉土および堆肥
- ## 4. 草花種子の屋内展示

学生が扱う種子の発芽状態を観察しやすい、日当りのよい場所を選定する。透明プラスチック容器（通称バック。くだもの屋で苺その他の果実を入れて販売）各々に水を含ませた脱脂綿をしき、その上に花の種子をまいて発芽状態を観察させる。

## 準備 (一)

学生には次のようなものを準備させる。

1. 服装 労働用スラックス、くつ、軍手、手ぬぐい、日よけ帽子（あるいは手ぬぐいで代用）

## 2. 苗床用容器

廃物利用の空缶、木箱、透明プラスチック容器（通称バック）等を二〜三個各自用意。透明プラスチック容器が一番望ましい。透明なので内部の土の状態（底にゴロ土をおきその上に細かい土をのせる）が点検できる。

## 3. ラベル (A) 草花および学生の記名用のもの各一枚ずつ。

風雨にさらされても消えない記名のしかたを学生各自に創意工夫させる。

ラベル (B) 花壇用のものでグループの学生の記名用木製

立札、図工の教科で製作。

## 実施 (一) 苗床づくり

## 1. 事前教育

園芸に精通する自然科学概論のW先生の協力をえて、あらかじめ草花栽培に関する講義をきく。その内容は土壌、肥料、種子のまき方、育て方、移植のしかたその他いろいろの注意。

## 2. グループ編成

四く五名を一グループに編成する。この際、学生相互の人間関係を拡大するため特定の交友関係を考慮しなかった。

### 3. 種子の配給と栽培開始

前述の種子を各グループに配給する。学生は受講した知識やデモンストラーションをもとに種まきを開始する。使用の土は校庭の造園用黒土を利用、以後草花の観察養育をつづける。

後日、草花の苗が移植する段階に至り、花壇に定植する。球根は秋の開花を計画したので夏になってから植える。

### 実施 (二) 花壇および芝生づくり

まず前年度移植して枯れた芝を、土と草に分ける。黒土は表土として使用するため他の場所にとり除いておく。草は堆肥として使用。次に硬化した粘土地を掘りおこし、空気と日光にあてかたまりをほぐす。地中の石は除去する。堆肥、油粕、過燐酸石灰、苦土石灰を元肥として施し、とり除いておいた黒土の一部を入れて整地をする。

花壇にする箇所を設定。それ以外の空地に牧草の種子をまき、のこりの黒土をうすくかぶせ、その上を軽くおさえて水を散布する。発芽まで、ゴザ、ムシロ、ビニール等をかけて保護する。

以上大体土づくり、花づくり、芝生づくりを報告した。実施過

程においては多くの教育的意義を経験することができた。それらのいくつかをひろいあげてみると、まずグループ編成がある。保育者の現場の人間関係は多角的である。教師と子ども、教師と父母、教師と教師、教師と経営者というように、複雑多岐である。特定の交友関係をさげ、無作為にグループを編成したのも将来のことを考慮してのことであった。グループの中で新しい人間関係をつくり、作業の過程において親睦と相互理解を深めてほしいと願った。結論的には人間関係のうまくいったグループもあれば、そうでないグループもあった。しかしこれらの人間関係が直ちに植物栽培の上にも反映した。

私は日照りの日も、暴風雨のさ中も、あえて学生の植物に対する扱いをみてまわり、できるだけその記録をとって学生評価対象の一つとした。これらの植物を点検（観察）することによって、学生各自の愛護の度合とグループの協力の度合とを察知することができた。そして、それを今後の学生指導の資料にした。苗の移植の段階に達しさらにこのことは明確に示された。苗床の容器を一堂に集めその発達状態を学生に比較観察させた。保育原理や心理学の理論をまたずとも、植物は如実に生長発達の原理、個体と環境論、養育態度の是非論に及ぶ諸問題を、暗黙のうちに提起してくれた。がっしりした苗に育ったもの、色つやも悪くひよろひよろと弱々しげに育ったもの、うぶ毛のようになって十分育たな

かったもの、また全く発芽がみられなかったものなどがあり、各かなり差が示された。これは植物のおかれた環境や養育態度の欠陥によることが明らかにされ、学生自ら反省の契機が与えられた。

苗床用ラベルについては、創意工夫をさせたが、定規入れ、木片、折箱を利用したものから、ボール紙、用紙をセロテープでおったもの、透明のプラスチック容器を二重にして、その間にのりではったものなどがあつた。また記名材料もインク、墨、マジックインク、クレヨン、エナメル等があり、日光や風雨にさらされても消えない記名の方法がひろうされた。これは現場で幼児の植物栽培の際に参考になると思う。

土に接することに積極的な態度を示さず、地中から這い出す昆虫や小動物に奇声をあげて逃げまわっていた学生たちも、次第に自然に親しむようになった。素手で土をいじり、手にマメができても軍手の必要を感じなくなった。作業開始当時は作業道具の扱いも不得手であつた。土をおこすのに必要な力の使いかたや、身の動きを知らぬ者に身をもって実地的な指導をしなければならなかつた。しかしこれも、自分自身の体重を巧みに使い、大地にシヤベルを突きさすことも会得するようになった。

作業道具の不足と女性の体力を考慮し、作業中はグループを二つに分け、休息と作業を交替させた。小鳥の声に耳にかたむけな

から大地に寝ころんで休むもの、土に腰をおろして楽しみに談話にふける学生たちの群がみられた。よごれることを気にせず土に親しみ、小動物を追って大地を這いまわる学生の姿がみられるようになったのも、一つに作業支度の効果によるものと思われる。

この点には、かなりきびしい点検に留意した。そのために付属高等学校から、卒業生が不用になっておいていった使用可能な運動靴をもらいうけ、作業靴の不備なものに貸与する準備もしておいた。太陽のもとでは必ず帽子あるいは手ぬぐいを使用して直射をさげさせ、現場の園外保育時の子どもの扱いの一つとして注意を促した。

植物栽培開始一ヵ月ごろには、学生の自主的行動がみられ、指示をまたなくても、作業道具の出し入れ、使用後の始末がみごとに行なわれた。敏捷な行動で作業に使用した各自の道具の土をおとし、水で洗って整然と並べて干し、乾いたところに誰がしまつともなく、所定の場所にしまわれていた。これは、学生の生活態度の一面がうかがわれ喜ばしく思った。ただ学生の視覚的行動の変化はともかくとして、それにとりまう内面的変化についてはかり得なかつたことは誠に残念であつた。

この試案は、一般教育科目の「自然科学概論」および専門教科「園工」との横の連携と協力によって実現をみたことを特記せねばならない。幸いに「自然科学概論」の担当者が園芸の實際にく

わしく、直接間接に指導をうけることができた。また「図工」担当者には木製ラベルの製作の協力を得た。

従来の保育科教育課程のありかたとして、一般教育科目を充実させて人間教育をはかる立場と、専門教育科目を重視して職業または職能教育に重点をおく立場とが対立的であった。望ましい保育者育成の観点から、保育科教育課程のあり方や内容を考えてみると、この両者が必須条件として要求される。すなわち情操豊かな教養人であると同時に職業人でもあらねばならぬのである。

保育科の教育課程は他学科とはちがいとくに教職専門科目の教育科目が多く、一般教育科目、教科専門科目との三本の柱から構成されることをその特色とする。これら教科の均衡と横の連携をはかるには、かなり緊密な教科間の連携と協力を保ち、保育科学生に役立つものを教授内容にもりこむことを相互に打合わせることが一つの対策であろう。

自然を愛する心は植物栽培によって誘発され、さらに育てられる。植物は人の愛情を裏切ることなく養育者の「育ての心」に応じていかようにも変化する。それは成長もすれば遅滞もする、あるいは枯死することもある。真の愛情のこもった扱いは植物の成長を促し、美しい開花の次元にまで導き、立派な種子を生産させる。幼稚園教育要領の「自然」の領域には

①身近な動植物を愛護し、自然に親しむ。

②身近な自然の事象などに興味や関心をもち自分で考えたり扱ったりしようとする。

と述べてある。動植物を愛護する精神を養うことは、とりもなおさず情操豊かな人間性の育成にその主眼をおくのである。豊かな情操の基盤の形成期にある幼児に、動植物の愛護と自然に親しませる機会を与えることが、いかに重要なことであるかを理解することができる。ここにおいて、幼児教育にたずさわるものの情操教育と望ましいパーソナリティの形成が「幼児教育」に先行して強調される。

物質文明と社会構造の複雑化に伴い、人間性の喪失がその現象としてみられるようになった。保育者においてもその例をまねがれるものではない。これは教育のありかたにその責任の一端があるのではなからうか。ともすると単位や資格取得にうき身をやつす学生と学校当局のあり方が、教育の何であるかを忘れ、人間性を無視した教育の価値観に支配されているように思われる。保育者の養成にあたり、質的人間教育の重要性を特に強調することでは、教育の原点にかえり、保育の意義をあらためて考えることはなからうか。

(鶴川女子短期大学保育科)